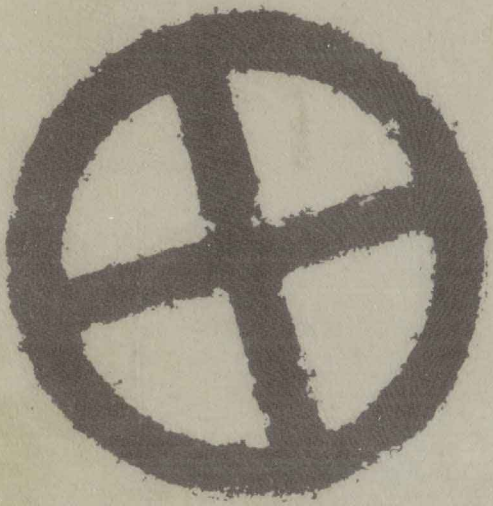

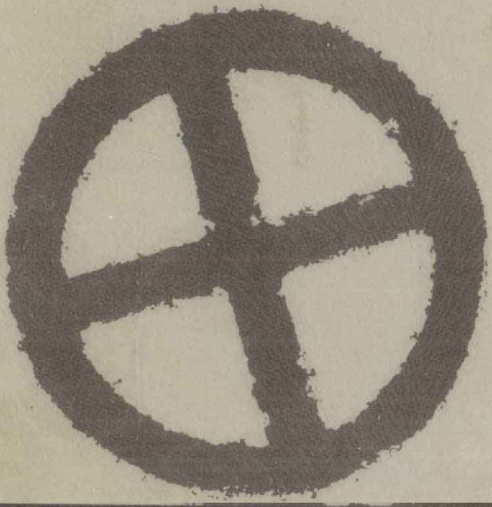

西郷隆盛　第十四巻
渦潮の巻

書名	西郷隆盛　渦潮の巻
著者	林　房雄
定価	四〇〇円
発行所	徳間書店　東京都港区新橋四の一〇
発行者	徳間康快
発行日	昭和四十年十二月二十日　初刷
印刷所	図書印刷株式会社
製本所	大口製本印刷株式会社
製函所	王子紙器加工所

乱丁，落丁ありましたらおとりかえいたします　　林　房雄©

林房雄

西郷隆盛

第十四巻＝渦潮の巻

西乡隆盛／目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

渦潮の巻＊＊＊＊目次

第一章　浮子＊＊＊＊9
第二章　礼砲＊＊＊＊21
第三章　日当山＊＊＊＊33
第四章　烏天狗＊＊＊＊55
第五章　奸物＊＊＊＊69
第六章　兵庫港＊＊＊＊77
第七章　諒闇＊＊＊＊96

第八章　賢侯＊＊＊＊104
第九章　大阪城＊＊＊＊114
第十章　老公と老公＊＊＊＊125
第十一章　まわり灯籠＊＊＊＊141
第十二章　葉楼日記＊＊＊＊154
第十三章　長法寺＊＊＊＊173
第十四章　鯨海酔侯＊＊＊＊190
第十五章　長崎の秋＊＊＊＊209
年表＊＊＊＊219

挿絵・山崎百々雄／装幀・上口睦人

渦潮の巻

第一章　浮子

慶応二年六月始めのある日、西郷吉之助は指宿温泉から遠くない鰻池で釣糸をたれていた。まだ梅雨の気配ののこった曇り日の午後である。

浮子はほとんどうごかない。たまに釣れるのは小指ほどのフナばかり。だが、それでよかった。久しぶりの休暇だ。やがて臨月になる妻、糸子は宿にやすませてある。吉之助のからだにも心にも疲労のかすがたまっていた。すこし肥りすぎたようだ。五体をうごかすのがものういことがある。まだ健康がおとろえたとは思わぬが、自分もついに四十歳の声を聞いたのだ。

薩長密約の成立以来、すでに半年。政局の動きはあわただしい。将軍家茂は大阪城に本営をすすめ、征長戦争ははじまっている。これまでのところ、幸いに長州軍が優勢で、いわば連戦連勝の勢いらしいが、幕府としても、将軍親征の形をととのえた以上は、このままでひっこむはずはない。征夷大将軍の面目にかけても戦いぬくであろう。負ければ、幕府の命取りだ。小栗上野介、小笠原長行などの主戦派はフランス公使ロッシュの援助を得て、フランス士官を雇い、幕軍の再装備と強化に必死になっている。イギリス公使パークスも、ロッシュとは仲がわるいと言われているが、必ずしも長州の味方ではない。この二大強国を敵にまわしたら、戦局は逆転する。長州のみか、薩摩の――いや、日本

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の命取りとなる。
吉之助は家老の小松帯刀、桂久武、同志の吉井幸輔らと協力して、島津久光を説き、藩政改革と陸海軍の拡張だけは承認させた。だが、薩長密約のことは、まだ久光の耳には入れてない。もし長州の敗勢が明らかになったら、薩摩は密約を守って、ただちに出兵しなければならぬが、その時、果して久光が承知するかどうか？
鰻池は小さな沼ほどの火口湖で、湖畔に温泉が噴出しているが、湯治場というほどのものではなく、宿屋もない。吉之助は村名主の家の一室をかりて泊っている。粗末すぎる宿だ。ここまで逃げて来たのは、ひとときの孤独と静寂を楽しむためであったが、からだは休まっても、心はおちつかず、いつも風の日の湖のように波立っている。
「いよいよ四十か。孔子は四十にして惑わずと言った。とんでもない。おれはまだ惑ってばかりいる。聖人にはかなわないな」
浮子が沈んだ。竿をあげると、また小指ほどのフナであった。吉之助は苦笑して魚を水にかえし、自分に言った。
「しかし、惑ってはならぬ時だ。おれが惑えば薩摩も惑い、長州も惑い、日本そのものがぐらつく。人前で言えることではないが、これは自惚れや増上慢とはちがう。男の責任感だ。西洋諸国の侵寇から日本を守るために、雄藩を連合し、長州を助け、幕府を諸侯の列に落して、大権を朝廷に集中する。このこと以外には、日本を救う道はない。この道を守り通すためには、ゆるがぬ魂が必要だ。この一点に腰をすえることが、不惑の境地に至る道かもしれぬ」

湖畔の道に蹄の音がひびき、次第に近づいてきた。

*

吉之助はふりかえらなかった。浮子が沈み、また浮いた。フナのあたりではないらしい。

「西郷先生！」

馬からおりて呼びかけた声は、五代友厚であった。彼は蘭学と海洋術の研究生であったが、薩英戦争のとき、船を焼かれて、仲間の寺島宗則とともに英軍の捕虜となり、それを恥じて藩に帰らず、横浜に身をひそめて英学を勉強していた。小松帯刀と吉之助のはからいで帰藩をゆるされ、寺島とともに第一回のイギリス留学生十四名に加えられてロンドンにおもむき、帰ってきたばかりの青年である。

「先生！」

五代友厚は泡をかんだ馬の口をとり、自分も荒い息をしながら、上ずった声で、「パークス公使がやって来ます。長崎からの寺島の報告によれば、パークスは今月のはじめからグラバー屋敷に滞在していましたが、いよいよ鹿児島訪問の腹をきめたようです。もう出帆したかもしれません」

吉之助はふりかえった。

「寺島はまだ長崎か？」

「いえ、帰って来ました。指宿の浜崎屋太平治とお宿のほうで待っています」

「ほう、浜崎屋も」

「あっ、先生、竿が……」
浮子とともに竿先がはげしい勢いでしぼりこまれた。
吉之助は大きいからだに似合わぬ素早さで竿を立て、満月になった竿の形を楽しみながら、
「鯉だ！　大きいぞ。君たちの御馳走ができた。……おっと、……いや、大丈夫。……友厚、その手網をたのむ。……なに、逃がすものか！」
二尺近い大鯉をあげた吉之助は絵にかいたような恵美寿顔で竿をかつぎ、ビクは友厚にもたせて、宿にひきあげた。
鯉の料理は妻と宿のおかみにまかせ、吉之助は温泉の湯気の向うに湖の見えるせまい座敷に、五代と寺島、浜崎屋太平治を迎え入れた。
「寺島、パークスのひきいてくる軍艦は何隻だ？」
「三隻です。旗艦はプリンセス・ロイヤル号。新任の東洋艦隊司令官キング提督が同行しています」
吉之助は苦笑した。
「用心堅固だな」
「いえ、公使も司令官もグラバーも、夫人同伴で」
浜崎屋太平治がひきとって、「まず親善の訪問と見てよかろうと存じます。私はグラバー屋敷ずっとパークス公使の動きを見ていましたが、下関と長崎で半月近く時間をかけたのも、つまり両天秤をかけていたのですな」
「どういう意味だ？」

「パークスさんは上海から日本に来たばかりで、幕府と長州のどっちに賭けたらいいかわからなかったのですな。まだ薩摩も信用しておりません。長州征伐では幕軍が勝つかもしれぬと思っていたようです。ところが、どうやらその逆になりはじめたので、腰を上げて鹿児島にくる気になった」

「……」

「これにはグラバーさんの説得も効きめがあったようで。……ご存知のとおり、グラバーは薩摩びいきで、長州びいき――というよりも、イギリス人のくせに、日本の国主は幕府ではなく、遠い昔から京都の朝廷だということを知っている。そのことで何度もパークスと議論していたようですが、パークスはイギリスのサムライですから、商人の言うことを聞く人物ではありません。議論は徹夜になり、夜の白むころ、パークスさんが真っ赤な目をして軍艦に帰って行くのを、私は一度ならず見ました」

*

「親善の訪問なら歓待せねばなるまい」

吉之助は言った。「五代、寺島。パークス公使一行の接待費はどのくらいかかる見こみだ？」

五代友厚は、答えた。

「まず、ざっと一万両」

寺島宗則は首をふって、

「とてもたらぬ。合せて一千名近い士官と水兵がいます」

「また物要りだな」

西郷は眉のあいだにしわをよせたが、思いなおしたように首をふり、タバコに火をつけて、「仕方があるまい。こっちが招待したのだ。礼は十分につくさねばならぬ」

「ぜひ、そうしていただきたいものです」

寺島宗則が言った。「ミニストル・パークスは昨年の建白書のことを、まだ根にもっています」

建白書というのは、四カ国連合艦隊が大阪湾に入港した際、家老の岩下方平が京都留守役内田仲之助の名で、「もし京阪の地において、外国艦隊が不法をはたらいたならば、断乎決戦に及ぶべし」という意見書を老中あてに出した。

幕府はそのことをフランス公使ロッシュを通じてパークスに伝えたらしい。果して、短気なパークスは、薩摩はイギリスと和親を誓い、償金まで出しながら、今に至って、このような公然たる敵意を示すとは何事だと頭から湯気を立てた。

岩下も軽卒であったかもしれぬが、つまり幕府とロッシュの策略にうまくひっかけられたということになる。

薩摩としてはあわてざるを得ない。フランスが幕府方であるのは今さらどうしようもないが、イギリスをまで敵にまわしてしまっては危険この上もない。小松と大久保は藩庁の重役たちと協議して、家老の桂久武を長崎に派遣して、グラバーに調停をたのむことにした。ちょうど領事のガワルも横浜から長崎に来合せていたので、桂はこの二人に、「薩摩の声明は京都の朝廷を守護する決意を示したもので、諸外国に対する敵意を強調したものではない。薩摩が開国和親の方針を守っていることは、パークス公使が鹿児島に来てくれれば、すぐにわかる、現に薩摩はグラバーの世話で十四名の留学生を

ロンドンに送り、大いにイギリスの文物を輸入しようとしている。ぜひ公使に鹿児島に来ていただきたい」と頼みこんだ。

日本びいきのグラバーは自分で横浜まで出かけて行き、パークスを説いた。パークスはすぐには承知せず、通訳官のシーボルトを江戸の薩摩屋敷におくり、建白書の起草者である岩下方平を詰問させた。岩下は進んでイギリス公使館におもむき、百方陳弁したので、パークスは機嫌をなおし、もし正式の招待状をよこすなら鹿児島を訪問しようと約束した。

藩庁はこの返事を岩下から伝えられて、大いにまごついた。招待しても、何を見せたらいいか、下手をすると、お寒い内懐を見すかされることになって、つまり籤蛇だと心配するものが多かった。そこへ西郷吉之助が京都から帰国して来て、

「呼ぶがよい。何もかくすことはないぞ。あるがままを見せた上で、イギリスの方針をきめさせるのだ」

この一言で、万事がきまり、正式の招待状が発せられた。パークスからは喜んで招待に応ずるという返事が来た。

西郷は知らなかったが、パークスには、ぜひ薩摩を訪問したい秘密な理由があった。彼は本国の外務大臣カラレンドン卿から、「イギリスは幕府よりもミカド派の諸藩を援助せよ。そのほうが賢明である」という内訓を受取っていた。

*

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com